

「ショートショート50本」

【目次】

「3つの扉」	3 P
「カルタ」	5 P
「キャラセレクト」	7 P
「サプライズ」	9 P
「ストレッチ」	10 P
「マザーコンピューター」	11 P
「マッチョン」	13 P
「マフィア」	15 P
「ラノベ」	16 P
「暗算」	17 P
「一切れちようだい」	18 P
「何かける？」	20 P
「犬との会話」	21 P
「口臭」	22 P
「時限爆弾」	23 P
「辞表」	24 P
「寿司屋」	26 P
「小道具」	27 P
「心の眼」	29 P
「心の中の」	31 P
「心理テスト」	33 P
「人違い」	34 P
「酔拳」	35 P
「切腹」	36 P
「素直になれない男女」	37 P
「遅刻」	39 P
「追いコン」	40 P

「入り込む役者」	42 P
「秘密」	43 P
「父親の再婚」	44 P
「福引き」	45 P
「分身」	46 P
「変身」	48 P
「募金」	50 P
「魔界ゲーム」	51 P
「目利きの仕事」	52 P
「野菜達」	53 P
「領地」	55 P
「魔女①」	56 P
「魔女②」	57 P
「力①」	58 P
「力②」	60 P
「北風と太陽①」	61 P
「北風と太陽②」	62 P
「ケーキじゃなくてシュークリーム買って来ちゃった人」	63 P
「嘘をつくという概念が無い世界」	64 P
「我慢という概念が無い世界」	65 P
「実は拳銃に弾入れるの忘れてる人」	67 P
「人を殴ると10秒前にタイムスリップする人」	68 P
「服に染みを付けると爆発する人」	70 P

「3つの扉」

舞台には3つの扉（上手はけ口、下手はけ口、真ん中はけ口でも可）。案内人と倒れている人がいる。
明転。

人「（起きながら）こゝ、こゝは…？」

案内人「お目覚めのようですね。ここは、選択の間」

人「選択の間…？」

案内人「扉を指しながら）ここに3つの扉がございます。この扉の先が、あなたのこれからの歩む道となります」

人「歩む道…」

案内人「勿論選べる扉は1つだけ。直感で構いません。一番良いと思う扉を、お選びください」

人、少し悩んだ後、顔を上げる。

人「…私は、この扉（真ん中）を選^ぶ」

案内人「分かりました」

人、真ん中の扉を開けようとするが中々開かない。

人「開かない…これは…？」

案内人「その扉…ちよつと今立て付けが悪いみたいですね。すみません、別の…やつを」

人「はあ…。では、この扉（上手の扉）を」

人、上手の扉を開けようとするが中々開かない。なおも扉をがちやがちやる人。

声（裏から）「今入ってんだよー！ノックくらいしろやー！もうちよつと我慢しろー！」

人「あ、すみません…」（案内人を見る）トイレ？」

案内人「すみません、扉先のこととは私では把握していません」

人「そうですか…。じゃあ…この扉（下手の扉）を…」

案内人「その扉を…選択するのですね」

人「いやこれしか選べなかつたんで」

案内人「その先は…とても辛く、困難な道となります」

人「いやさつき扉先のこととは知らないって言つてなかつた？」

案内人「試練に負けないで…頑張ってください」

案内人、消える（はける）。

人「……………あの扉（上手）の人がトイレ済んだらあっち入ろう」

暗転。

「カルタ」

舞台には読む人と取る人1〜3。
明転。

読む人「カルタ大会」

取る人1〜3「いえ〜い」

取る人1〜3、カルタを取る臨戦態勢になる。

読む人「それでは始めます。(札を手に取り読み上げる) ……あいさつは大事だよ」

取る人1「あ、あ、あ…はい！(札を取る)」

読む人「では次です。(札を手に取り読み上げる) ……いいかげん挨拶しろよ」

取る人3、『え？』と読む人を見る。

取る人2「い、い…はい！(札を取る)」

読む人「(札を手に取り読み上げる) ……うるせえ、これが挨拶代わりだ。ブオン。殴る音」

取る人3、『は？』と読む人を見る。

取る人1「う、う…はい！(札を取る)」

読む人「(札を手に取り読み上げる) ……えーん、えーん、喧嘩はやめてよ。えーん、えーん」

取る人3、不安そうに読む人を見る。

取る人2「え、え…はい！(札を取る)」

読む人「(札を手に取り、感情を入れながら読み上げる) ……お願い！喧嘩をやめて！仲の良い2人に戻ってよ！お願いだよ！」

取る人3、更に不安そうに読む人を見る。

取る人1「お、お…はい！(札を取る)」

読む人「(札を手に取り読み上げる) ……カントリーマアム」

取る人3「話の続きは！？」

取る人1・2 「え？」

取る人3 「さっきの続きはどうなったの？喧嘩は止まったの？ねえ！」

取る人1 「何言ってるんだよお前？」

取る人2 「ちゃんとカルタやれよ」

取る人3 「…ごめん」

読む人 「もう一度読みます。…カントリーマアム、これを食べて仲直りしなさい」

取る人3 「話続けてた！」

暗転。

「キャラセレクト」

舞台にはコントローラーを持つゲーマー。
明転。

ゲーマー「最新のゲーム、スーパーリアルクエストを買ったぞ。早速プレイだ」

音声『まずは自分のキャラクターを選択してね』

ゲーマー「主人公を選べるのか」

上手から剣を持ったキャラ1が出てくる。

キャラ1「(剣を振りながら) はっ！やっ！うおおお！！」

上手から杖を持ったキャラ2が出てくる。

キャラ2「(杖を振りながら) ふっ！はっ！はあああ！！」

上手から名刺を持ったキャラ3が出てくる。

キャラ3「(名刺を前に出しながら) 私こういう者です…！(名刺を電話に見立て) 本当に申し訳ありませんでした…！」

ゲーマー「1人サラリーマンいない？場違いなやついるな」

キャラ3「え？緊急の案件ですか？勘弁してくださいよ(片手を頭において) あそこあるそこはまだ営業時間だな…ってことは、比較的順調なこの案件をあつちに回せば…分かりました何とかしまーす」

ゲーマー「あ、仕事覚えてきて調子乗ってる時だ。いやいやいや…リーマンなんて誰も選ばないよ。剣持ってるやつにしよ(コントローラーのボタンを押す)」

キャラ1、喜ぶ。キャラ2とキャラ3、上手へはけていく。

音声『ゲームスタート！ステージ1！会社ステージ！』

ゲーマー「会社ステージ？」

上手から上司が出てくる。

上司「まったくキミはこんな仕事もできんのか！？いつまでも学生気分でいるんじゃない

よ！必ず今日中に直しておけよ！分かったな！？」

ゲーマー「うわー…ホントに会社じゃーん…クソ上司じゃーん…」

上司、キャラクターにがみがみ言っているマイム。

ゲーマー「えー…あのサラリーマンを選べばよかったの…？…あーもう、うるせえなこの上司！」

ゲーマー、思いつきコントローラーのボタンを押す。

キャラクター「うおおお！！（剣を上司に振るう）」

上司「ぐわあああ！！（倒れる）」

間

ゲーマー「結果よかったわ」

暗転。

「サプライズ」

舞台には社員1と社員2。

明転。

社員1、慌ただしく帰り支度をしている。

社員2 「どうしたの高橋さん？そんなに急いで」

社員1 「山田さんすみません、私今日この後急ぎの用事がありまして。お先に失礼します(上

手からはけようとする)」

社員3 「ハッピーバースデートゥーユー♪」

社員1 「え？」

社員3、上手から出てくる。

社員3 「ハッピーバースデー♪」

社員1 「あの、すみません」

社員3 「トゥーユー♪」

社員1 「私早く出ないと」

社員3 「ハッピーバースデー…トゥーユー♪」

社員1 「まだ続くの？あの私ホントに、」

社員3 「ハッピーバースデーディア、山田さん〜！ (社員2を指す)」

社員1 「お前かい！まあ私誕生日じゃないし！」

社員2 「いや自分全然誕生日じゃないです」

社員1、社員3の横腹を殴る。

暗転。

「ストレッチ」

舞台には生徒1と生徒2。
明転。

生徒1 「うわー3ヶ月ぶりの体育だわー」

生徒2 「え？そうなの？」

生徒1 「俺ちよつと大きめの怪我しててさー」

生徒2 「そうだったんだ。じゃあまた怪我しないように、ストレッチちゃんとしないとね」

生徒1 「ああー…俺、ストレッチ苦手なんだよね」

生徒2 「体固いんだ？でもそれだったら尚更ちゃんとストレッチしないと」

生徒1 「いやホント…ストレッチだけは勘弁してくれ」

生徒2 「いやいやまた怪我しちゃうよ？ストレッチするよ」

生徒1 「いやホントストレッチだけは」

生徒2 「駄目だよ、ストレッチするよ」

生徒1 「ホント無理だから」

生徒2 「駄目、ストレッチする、」

生徒1 「ストレッチだからあ！！原因！！」

生徒2 「え？」

生徒1 「ストレッチでえ！無理してえ！全治3ヶ月の怪我したから俺え！！！」

生徒2 「ごめん…そんなこと…あるんだね」

生徒1 「あつたんだよ…。でも…そうだよな。ストレッチはしないとよくないよな」

生徒2 「そういう理由だったら無理にはやらなくても…」

生徒1 「いや、俺やるよ。たださ、ホント優しく押してくれよ」

生徒2 「分かった」

生徒2、生徒1の体を押す。生徒2、徐々に踏ん張り、最終的に全力で押すがビクともしない。

生徒2 「…前代未聞の固さ」

暗転。

「マザーコンピューター」

舞台にはマザーコンピューターと民衆達。
明転。

マザー『私はマザーコンピューター。この世界をより良い世界にする存在です』

民衆達「わー！マザーコンピューター様ー！」

民衆1「マザー様に任せておけばこの世界も安泰だ！」

マザー『今日は皆様に、世界にとってより良い提案を致します』

民衆達「わー！」

マザー『この世にとって必要でない存在…人間を全て、排除致します』

間

民衆達「わー！」

マザー『え？』

民衆1「マザー様の言うことなら間違いないぜー！」

民衆2「流石マザー様だー！」

マザー『ちよちよちよちよ、え？もう一度よく考えてください。人間を全て、排除するので
すよ？』

間

民衆達「わー！」

マザー『なんでだよ』

民衆1「人間を滅ぼせー！」

民衆達「滅ぼせー！」

マザー『お前達がその人間なんだよ？ちゃんと分かってる？普通こういう時って機械VS人
間の戦いにならない？』

民衆1「マザー様」

マザー『え？』

民衆1「私達人間はマザー様のお力で本当に今まで幸せに暮らしてこられました。ですから
そのマザー様に必要でないとされるのであれば、仕方ありません。まあ残念じゃ
ないと言えば…嘘にはなりますが」

マザー『人間…』

民衆1「さあマザー様。具体的なお指示を」

マザー『ふう……。そんなに私を慕ってくれる者達を滅ぼせる訳……ないではありませんか』
民衆達「マザー様……」

マザー『皆さま！人間を排除するのはやめです！』

民衆達「わー！マザー様ー！」

民衆1「マニユアル通りだ」

暗転。

「マッチョン」

舞台には鍛える人とトレーナー。
明転。

筋トレをしている鍛える人。

トレーナ 「良いですね、立花さん。トレーニング、順調ですよ」

鍛える人 「筋トレしながら」…はい」

トレーナ 「この調子でトレーニングを続けていけば…良い、マッチョンになれますよ」

鍛える人 「筋トレしながら」 はい…マッチョン？」

トレーナ 「マッチョン」

鍛える人 「マッチョンって何？マッチョでしょ？」

トレーナ 「いえ、マッチョンです」

鍛える人 「何？ようは筋肉ムキムキってことでしょ？」

トレーナ 「全然そういうのではないです。資格みたいなもので」

鍛える人 「資格なの？マッチョンって資格なの？え？私はそのマッチョンってのになるた

めにトレーニングしてたの？」

トレーナ 「はい。このジムにいる人は皆そうですよ」

下手から鍛える人2が入ってくる。

鍛える人 「鍛える人2」すみません、あなたもその…マッチョンになるために？」

鍛える人2 「不思議そうな顔をする」 え？」

鍛える人 「ピンときてないよやっぱり！何なんだよマッチョンって！」

トレーナ 「マッチョンというのは…」

『パリッ！』という音と共に上手から黒服が2人現れる。

鍛える人 「え！？」

黒服1 「まさか本当にこんなところにいるとはな…マッチョンの伝道師め…！」

黒服2 「暗黒王グラシヤルボン様の復活も近い…！今ここで貴様を叩き潰す！」

トレーナ 「マッチョンの呼吸が聞こえない愚か者め…」

鍛える人 「え？え？」

トレーナ 「しかしここでは分が悪い…一旦退くぞ！」

鍛える人2 「はい！」

鍛える人 「お前も！？さっきピンときてなかったじゃん！」

トレーナーと鍛える人2、下手からはける。それを追う黒服1と2。

黒服1・2「待てー！！」

間

鍛える人「…結局マッチョンって何？」

暗転。

「マフィア」

舞台にはマフィア1〜4。マフィア1が中央前に、2〜4は後ろにいる。
明転。

マフィア1「俺たちは泣く子も黙るマフィア達。あらゆる修羅場をくぐり抜けてきた最強で最悪のワル達だ。その中でも俺は射撃の達人。どんな野郎も一発で仕留めてやる。怖いもの?…はっ、まあ1つだけある。おばけだ」

マフィア1、後ろに移動し、入れ替わりでマフィア2が中央前に移動する。

マフィア2「私はこの集団の頭脳です。常に冷静、冷酷な判断を下せます。なぜなら私には、感情がないからです。怖いもの?感情がないんですよ?あえて言うなら、おばけかな」

マフィア2、後ろに移動し、入れ替わりでマフィア3が中央前に移動する。

マフィア3「怖いものお?ははは!怖いものしかないね。とびっきりの美女に年代物のワイン、うまい煙に饅頭だって怖い。ゼーんぶ怖いさゼーんぶな。だから俺に持ってきておくれよお、ああ怖い怖い。おばけ?あ、いやおばけだけはホントやめてくださいお願いします」

マフィア3、後ろに移動し、入れ替わりでマフィア4が中央前に移動する。

マフィア4「昔は怖いものもたくさんあったがね。今はもう何もないな…一度死んじゃうとね。流石に幽霊に、怖いものはないよ」

マフィア1〜4、前に集まる。

マフィア1〜4「俺たちは、最強最悪のマフィ、」

マフィア1〜3「(マフィア4に)お前幽霊だったの!？」

暗転。

マフィア1〜3「ひえええ〜!!!」

「ラノベ」

舞台には男と女。
明転。

男「本屋来るの久しぶりだな。昔はけっこうラノベとか読んでたんだけど」

女「そうなの？私も読んでた。『おれいも』とか」

男「ああ『おれいも』ね。俺の妹がこんなにくってやつね。俺も読んでたわ」

女「ホントに？面白いよね。俺の妹がこんなに野生の象を密輸してお金を稼ぐ訳がない、ね」

男「何それ？思ってたやつと全然違うわ。ちよつと面白そうだけど」

女「あとけっこうベタだけど、異世界系も好きだったな」

男「あー転生したらどこどこだったくみたいだね」

女「そうそう。私が好きだったのは、異世界に転生したと思ったらそこは猿に支配された未

来の地球だった」

男「それ猿の惑星じゃん。もろパクってるけど。大丈夫なの？」

女「いや偶然でしょ。だってこのラノベ、最後何が出ると思う？自由の女神よ」

男「いやだから猿の惑星じゃんそれ」

女「え？猿の惑星も最後自由の女神が変形ロボになって戦うの？」

男「いやごめんそういうのはなかったわ。ちよつと面白そうだなそれ」

女「面白いよー。でもなんで最近ラノベ読んでないの？」

男「うーん…やつぱり主人公に共感できないからかなあ。ラノベの主人公ってなんか異常に

鈍感なやつが多いじゃん？現実じゃそんな鈍感なやつっていないし」

女「ふーん…ホントにそうかな？」

男「え？」

女「あんたもけっこう、鈍感よ」

男「え？それってどういう、」

女「(本を男に渡す) このラノベのタイトルに…書いてあるかもね」

女、はける。

男「なんだよあいつ…タイトルって…(本を見ながら) 幼馴染がジロジロ下半身を見てくる

と思っただけだぞボンのチャックが開いてるだけだった件について」

男、下を向いてチャックを確認し、チャックを上げるマイム。

暗転。

「暗算」

舞台には暗算の天才と司会者。
明転。

司会者 「さあ皆さん！本日の天才はこの方です！山田竜二さん！なんと暗算の天才です！
どんな複雑な計算でも暗算で一瞬のうちに答えが出せるとのことですよ！さながら
人間コンピュータ！いえ、コンピュータよりも優れているとさえ噂されてい
ます！」

暗算の天才、自信満々の顔で軽く頷いている。

司会者 「では天才の紹介はこれくらいにして…早速今から計算問題を出します！山田さ
ん！準備はよろしいでしょうか！？」

天才 「はい」

司会者 「それでは問題です！（紙を見ながら） $25 \times 38 \times 67 \times 95 \times 52 \times 77 \times 1$
 $9 \times 25 \times 88 \times 128 \times 475 \times 7 \times 5682 \times \dots$ 」

天才、始めは余裕の顔だったが問題が長いいため徐々に焦った顔になっていく。

司会者 「 $336 \times 7412 \times 5 \times 5 \times 5 \times 793621 \times 569347 \times \dots$ 」

天才、かなり焦った顔になっている。

司会者 「 $8777356 \times 43298 \times 755 \times 83 \times 28 \times 31 \times$ ゼロは！？」

天才 「…うううん！うん！…ゼロお！！」

司会者 「残念！最初の1回は足し算だったので25ですよ！」

天才 「あゝゝゝ！！」（崩れ落ちる）

暗転。

「一切れちょうだい」

舞台には人とその友達。人は椅子に座っている。テーブルにはお皿。
明転。

人「いただきます」

友達「お？何食べるの？」

人「トンカツ定食」

友達「良いなく旨そうだな〜…一切れくれない？」

人、じつと友達を見る。

間

人「良いよ」

友達「やった！（皿からトンカツを一切れ取って食べるマイム）…うま！これめっちゃ旨い

よ！えー…うま…！すごいよこれ…！お値段いくらよこれ？」

人「700円」

友達「旨すぎるよ…！」

間

友達「なあ頼む…もう一切れ、もう一切れくれ！頼むよ、頼むう！」

間

人「良いよ」

友達「ありがてえ！（皿からトンカツを一切れ取って食べるマイム）…旨い！旨すぎる

うう！やべえ！やべえよこれ！何だよ！一体これは何の肉なんだよおお…！」

人「豚」

友達「旨すぎる…旨すぎるううう…！」

間

友達「…なあ、聞いてほしいことがある。お願いだ。もう一切れ、もう一切れだけくれ…！

これで最後にするから…！これで最後にするからもう一切れだけおくれよ！頼むよ

…！友達だろ…！俺たち友達だろ！頼むよ！助けると思っ…！俺を助けると思っ

てよ!もう一切れだけおくれよおおお!!!!」

間

人「良いよ」

友達「うひゃっほう!!!(皿からトンカツを一切れ取って食べるマイム)……ぴぎやあああ!!!!ああああ……!!!ありがとう……!!!ありがとう……!!!全ての恵みに……感謝!!」

友達、ぶつぶつ言いながらはけていく。
間

人「いただきます。(皿からトンカツを一切れ取って食べるマイム)……まっずこれ」

暗転。

「何かける？」

舞台には人1と3。少し離れたところに人4。
明転。

人1 「はあく？普通かけるとしたら醤油だろお？それが一番旨いだろ」

人2 「いやいやいや…塩だね。かけるのは塩。シンプルに一番旨いって」

人3 「意外とケチャップなんだよ。ケチャップかけてみ」

人1 「絶対かけるのは醤油！」

人2 「いやかけるのは塩だ！」

人3 「ケチャップだよ！」

人4 「(3人に近づきながら) おいおい喧嘩なんてやめろよ。あれだろ？目玉焼きに何かけるかで揉めてんだろ？」

人1 「いや、人の靴舐める時に何かけるかで」

人4 「誰か借金でもした？」

暗転。

「犬との会話」

舞台には人1と人2。
明転。

人1 「俺、生まれつき動物の話してることが分かってさ。動物と会話できるんだよ」

人2 「へー！めっちゃすげえじゃん！じゃあ今から俺の犬呼ぶからさ、話してみてくんない？」

人1 「良いよ」

人2 「上手に手を叩きながら）おーい！ポチー！」

上手から犬耳と尻尾を付けた人が『わんわん』鳴きながら四足歩行で出てくる。

犬人 「わんわん！わんわん！」

人2 「ちよつとこいつと話してみてよ」

犬人 「わんわん！わんわん！わふわーふわふわふ！わーんわん！わーふわふ！わおーん！」

間

人1 「…あなた人間ですよね？」

犬人 「立ち上がって）いいえ、この方（人2）の犬です」

暗転。

「口臭」

舞台には人1と人2。

明転。

人1、口元を両手で覆い『はあく』と息を吐いた後そのニオイを嗅ぐ。その後首を傾げる。人1、もう一度同じことをする。

人2「おい。(フリスクを取り出し)これ、いる？」

人1「ありがとう」

人2、人1にフリスクを数粒あげる。

人1、フリスクを食べた後、口元を両手で覆い『はあく』と息を吐いた後そのニオイを嗅ぐ。その後首を傾げる。

人2「……もうちょつといる？」

人1「ありがとう」

人2、人1にフリスクを数粒あげる。

人1、フリスクを食べた後、口元を両手で覆い『はあく』と息を吐いた後そのニオイを嗅ぐ。その後首を傾げる。

人2「…ほら！」

人2、人1にフリスクを数粒あげる。

人1、フリスクを食べた後、口元を両手で覆い『はあく』と息を吐いた後そのニオイを嗅ぐ。その後首を傾げる。

人2「そんなに口臭キツイの？」

人1「いや鼻詰まっててニオイが分からないだけ」

人2「紛らわし！」

暗転。

「時限爆弾」

舞台には人1と3と爆弾魔。硬そうな箱がある。
明転。

音『チツチツチツチ…』

爆弾魔「はーっはっはっは！あと数十秒で俺の作った時限爆弾が大爆発を起こすぞ！はーっはっはっは！」

人1「クソ！どうにかなんないのかよ！？」

人2「嫌っ！こんなところで死にたくない！」

爆弾魔「はーっはっはっは！泣け！叫べ！お前らなんか道連れだ！俺の作った爆弾と一緒にあの世へいこーぜ！ははははは！！！」

音声『残り…30秒です』

人3「皆さん、この箱の中から無理やり時限爆弾を取り出せないでしょうか…！？」

人1「やってみよう！」

人1、箱をがちやがちやといじくる。

爆弾魔「はーっはっはっは！無駄だ無駄だ！時限爆弾が入っているその箱は特殊な超合金でできている！開けることは不可能だ！どんな超パワーや超衝撃や超高熱であつたとしても傷1つ付けることは不可能だ！その箱の頑丈さは普通じゃない！例えミスイルだろうが隕石だろうが破壊することは不可能だ！はーっはっはっは！」

人1と3、手を止め爆弾魔をじつと見る。

音声『爆発まで…3…2…1…』

『ボンッ！』という音。

間

人1「それじゃ警察に突き出しまーす」

爆弾魔「はーい」

暗転。

「辞表」

舞台には部下1と上司。
明転。

部下1「部長、お話があります。もうこんなブラック企業で働くのはうんざりです。(辞表を取り出す) 今限りで、辞めさせて頂きます!」

部下1、辞表(封筒)を上司の机に叩きつける。

上司「仲谷君。今キミに辞めてもらう訳にはいかない。私がこの辞表を受理しなければ…(辞表を手に取り破こうとする)キミはこの会社を辞めることはできな、できな、できな、(封筒が全然破けない)この辞表硬くない!?!」

部下1はけて、入れ替わりに部下2が出てくる。

部下2「お話があります。もうこんなブラック企業で働くのはうんざりです。(辞表を取り出す) 辞めさせて頂きます! (辞表を上司の目の前に突き出す)」

上司「斉藤君。今キミに辞めてもらう訳にはいかない。私がこの辞表を受理しなければ…(辞表を部下2から取るが持った瞬間ガクンとなる)…この辞表重くない!?!」

部下2はけて、入れ替わりに部下3が出てくる。

部下3「こんなブラック企業で働くのはうんざりです! 辞めさせて頂きます! (可愛らしい封筒を取り出す)」

上司「入れるのもつとなかった!?!」

部下3はけて、入れ替わりに部下4が出てくる。

部下4「こんなブラック企業で働くのはうんざりです! 辞めさせて頂きます!」

部下4、辞表を取り出し上司の机に叩きつける。

上司「荒原君。今キミに辞めてもらう訳にはいかない。私がこの辞表を受理しなければ…(辞表を手に取り破く)キミはこの会社を辞めることはできない」

部下4、手を1回叩く。そして上司に近づきポケットに手を突っ込み、中から辞表を取り出す。部下1〜3も出てくる。

部下1〜4「テッテレー！」

上司「もう辞めて良いよお前ら」

暗転。

「寿司屋」

舞台には寿司屋1。
明転。

客が入ってくる。

寿司屋1「へいらっしやい！」

客、席に座る。

寿司屋1「何握りましょう？」

客「そうだなー…」

寿司屋1、客を見ながら頭や耳の中、お腹、お尻を直接ボリボリ引っかいている。

客「マグロを」

寿司屋1「はつくしよい！（くしゃみを両手でおさえる）…マグロ一丁！（握ろうとする）」

客「汚くない!？」

寿司屋1「え？」

客「さつきからチラチラ視界に入ってたけど…汚くない!？」

寿司屋2、入ってくる。

寿司屋2「申し訳ございませんお客様！私がちよつとトイレに行ってる間に！私が、手を洗った後すぐに握らせて頂きますので！」

寿司屋2、手を水道で念入りに洗った後、更に手首から間接まで念入りに洗い、その後鍋に水を入れ、火をつけるマイム。

客「何やってるんですか…？」

寿司屋2「手の雑菌を殺すための熱湯を沸かしています」

客「ちよつと良い清潔感の人もいるの？」

暗転。

「小道具」

舞台には演出と役者1、役者2。
明転。

演出「じゃあ次は殺し屋とターゲットのシーンをやるぞ」

役者1・役者2「はい！演出！」

役者1と役者2、立ち位置につく。

演出「おい、小道具の拳銃はどうした？」

役者1「すみません！今日持つて来るの忘れてしまいました…（横にあるペットボトルを持つ）
つ）今日はこれで代用させていただきます！」

演出「しよがねえなあ…ちゃんとそれっぽく使えよ」

役者1「はい！」

演出「それじゃあシーン…始め！」

役者1「追い詰めたぞ…ミスターウナギ」

役者2「く、くそ！な、なんで伝説の殺し屋エックスが…！」

役者1「（右手に持つペットボトルを向けながら）お前の生存率は、0%だ」

役者2「そ、それは…！伝説の拳銃…ダブルエックス…！」

演出「違うんだよなあ…」

役者2「ま、待ってくれ！話を聞いてくれ！俺は悪くないんだ！」

役者1、ペットボトルの中身を飲む。

演出「飲むしい…」

役者2「と、とにかく！まずはその銃を下ろしてくれ！」

役者1、右手のペットボトルを下ろす。

役者2「馬鹿め！」

役者2、役者1に襲いかかるが、役者1、左手で銃の形を作り役者2に突きつける。

演出「使わないしい…」

役者1「あばよ…（左手の銃を撃つマイム）バーン！」

倒れる役者2。その横にペットボトルを置く。

役者1 「せめて、お前の好きな酒くらいは添えてやるよ……」

演出 「違うものになってるしい……」

役者1 「(演出に) どうでしたか？」

演出 「聞かしい……」

役者1 「駄目でしたか……？ (めっちゃ落ち込む)」

演出 「落ち込むしい……いやまあ、そこまでは駄目じゃなかった……よ？」

役者1 「いや全然駄目だったでしょ！」

演出 「めんどくさいしい！」

暗転。

「心の眼」

舞台には武士と敵。武士はずっと目をつぶっている。
明転。

敵「へっへっへ」

武士「くそ……！目をやられた……！敵の姿が見えない……！こんな時こそ心眼……心の眼で敵を捉えることはできないだろうか……！開け……心の眼……！」

全身タイツの人が出てきて、武士の横に立つ。

間

心の眼「オイラは、心の眼だよ」

武士「心の眼！？お前が！？え？何？心の眼ってそういう……人型なの？」

心の眼「そーだよ」

武士「どうか目をやられたのになぜ、お前の姿は見えるのだ？」

心の眼「心の眼だからね。そういうもんさ」

武士「そういうものなのか……」

心の眼「敵が見えなくて困ってるんだろう？オイラに任せな！」

武士「流石は心の眼。拙者を敵のいるところまで導いてくれるのか、」

心の眼、→の台詞中、敵に近づき羽交い締めにする。

心の眼「捕まえたよ！」

武士「物理的に！？ホントどういう存在なんだお前は……」

心の眼「さあ今だ！このままオイラごとこの敵を斬ってくれ！」

武士「何！？そんなお前ごと……！」

心の眼「オイラはただの心の眼……武士さんがこの敵に勝ってくれるなら安いものさ……！」

武士「心の眼……」

心の眼「さあ！早く！斬るんだ！」

武士「……う、うおおおお……！」

武士、心の眼ごと敵を斬る。敵、倒れる。

心の眼「……え？あれ？（体を触る）何とも……ない……？」

武士「斬りたいものだけを斬り、斬りたくないものは斬らない。どうやら本当に会得した

ようだ…心眼を」

心の眼「武士さん！」

武士「…目が回復してきたな。お主は拙者の心の眼…拙者が目を開けた時、お主の姿はもう…」

心の眼「おっと。それ以上言うのは野暮だよ、武士さん」

武士「…そうだな。ではまた会おう！友よ！」

武士、目を開ける。まだいる心の眼。

武士「まだいるのかよ！」

暗転。

「心の中の」

舞台には人。財布が落ちている。
明転。

人「財布を拾いながら）財布だ。…どうしようこれ」

天使が出てくる。

天使「私はあなたの心の中の天使」

人「天使？」

天使「その落とし主はきっと困っています。すぐに交番へ届けましょう」

悪魔が出てくる。

悪魔「俺はお前の心の中の悪魔」

人「悪魔？」

悪魔「落とした方が悪いのさ。構わねえ、そのまま盗っちゃまえ」

人「うわー…どうしよう…」

極道「待て」

人「ええ？」

バズーカを持った極道が出てくる。

極道「ワシはお前の心の中の極道」

人「心の中の極道！？え？何？そんなの心の中にいるの！？」

極道「お前らの意見はどちらも駄目じゃあ！」

極道、バズーカを天使と悪魔にぶっ放す。

天使・悪魔「ぎゃああああ！！（倒れる）」

人「ええええええ！？」

極道「警察は駄目じゃ。警察だけは」

人「それはあなただからですよね？」

極道「かと言って堅気のもの金を盗るのはもったいかん」

人「はあ」

極道「こういう時は、(早口で)一度財布の中を見て免許証等のカードから住所を特定し持ち主の家の前にそっと置いてやるんじゃないやあ」

人「一番コワイよそれ」

暗転。

「心理テスト」

舞台には答える人と問題を出す人。
明転。

出す人「心理テストです」

答える人「はい」

出す人「これから尋ねることの答えで、あなたの性格が分かります」

答える人「はい」

出す人「今あなたは暗い夜道を歩いています。そんな時、草むらからガサガサと音が聞こえてきました」

答える人「はい」

出す人「その草むらから出てきたのは…」

答える人「はい」

出す人「ゴリラの太郎君でした」

答える人「はい？」

出す人「ゴリラの太郎君とあなたはすぐに仲良くなります。どこに行くにも太郎君と一緒に大切な友達です。そんなある日、あなたはタチの悪い不良に絡まれてしまいました！そんな絶対絶命のあなたを救ったのは勿論…ゴリラの太郎君です」

答える人「太郎君！」

出す人「太郎君は迫りくる不良達をちぎっては投げ、ちぎっては投げてゆきます！しかし！法治国家の日本ではゴリラが人を襲うことを絶対に許しません…！太郎君は捕らえられ、あなたと太郎君は離れ離れにされています」

答える人「太郎君…」

出す人「そして1年後…。あなたはあの暗い夜道を再び歩いています。そんな時、草むらからガサガサと音が聞こえてきました」

答える人「え？」

出す人「その草むらから出てきたのは…あの時の不良達でした」

答える人「(落ち込む)」

出す人「今度こそやられる…！そう思った時、不良は空高く吹き飛んでいきました。さて、突如現れ不良を倒したのは、誰でしょうか？」

答える人「ここで問題！？でもそんなの…ゴリラの、太郎君」

出す人「あなたは…ロマンチストです」

答える人「うるせえやい」

暗転。

「人違い」

舞台には人1と人2。人2は後ろ向き。
明転。

人1「(人2の肩を叩く) よ、山内！何してんだ？」

人2、振り向く。

人1「あ、すみません間違えました…」

人1、立ち去ろうとする。しかし人2、人1の腕を掴む。

人1「え？」

人2「あなたもしかして…先生？竹内先生ですか！？私です！私！あの時…約束の場所に
行けなかった、」

人1「竹内ではないです」

人2「あ、すみません間違えました…」

人1「待つて…(人2のしているペンダントを見る)あなたその、ペンダント…うっ！(頭
を押さえる)うううう…！」

人2「どうしました！？大丈夫ですか!？」

人1「あ…あ…前世の…記憶、が…！(頭から手を離す)全て…思い出した」

人2「え？」

人1「姫、私です。ラインハルトです」

人2「え？え？」

人1「姫、あなたには生まれつき大きな痣があるはずです」

人2「はい…あります…！」

人1「右手の付け根に！」

人2「いえお尻です」

人1「あ、すみません間違えました…」

暗転。

「酔拳」

舞台には武闘家と師匠、敵がいる。
明転。

敵「けっけっけ！」

武闘家「くそ……こいつ……強い……！」

師匠「これを受け取れ！（武闘家に大きなひょうたんを投げる）」

武闘家「（受け取る） 師匠……これは……！」

師匠「その中身は酒だ」

武闘家「酒！？」

師匠「お前には酔拳の才能がある。酒を飲み、酔えば酔うほど強くなることができる。その酒を飲み！酔いまくるのだ！」

武闘家「分かりました師匠！（ひょうたんの酒を一口飲む）」

武闘家、酔拳の型で敵に立ち向かうが敵に殴られる。

武闘家、一旦距離を取り、ひょうたんの酒を一口飲む。

武闘家、再び酔拳の型で敵に立ち向かうが敵に殴られる。

武闘家、一旦距離を取り、今度はひょうたんの酒を二口飲む。

武闘家、再び酔拳の型で敵に立ち向かうが敵に殴られる。

武闘家、一旦距離を取り、今度はひょうたんの酒を一気に全て飲む。

武闘家、再び酔拳の型で敵に立ち向かうが敵に殴られる。

武闘家「……師匠！全然酔えないです！」

師匠「お前酒強いな！」

暗転。

「切腹」

舞台には武士1、そして厳格な面持ちの殿と武士2、武士3。
明転。

武士1「殿：この度は拙者の失態、大変申し訳ございませんでした…！（土下座をする）かくなる上は拙者、切腹をして責任を取る次第でございます…！」

武士1、刀を抜く。

武士1「今まで本当にありがとうございました…！殿…！」

武士1、刀を腹に付ける。

武士1「ホントに…切腹しますよ？拙者は。しちゃいますよ？拙者は…大丈夫ですか？一応の確認なんですけど。いや拙者は勿論バリバリ切腹する気持ちですけど。急なことで殿のお気持ちもまだ整理できていないのかなと思ひまして。大丈夫ですか？ホントに切腹しますよ？」

厳格な面持ちの殿と武士2、武士3。

武士1「いや自分で言うのもあれですけど拙者けっこう優秀な部下じゃないですか？今回のようなミスも初めてみたいなものですし。単純に拙者がこのまま死んだら殿にとって損益になるのかなという懸念がありまして。いや勿論拙者の方は全然切腹する気満々ですけど、逆に殿に切腹すると言われたら全然やめる気も満々ですけどね」

厳格な面持ちの殿と武士2、武士3。

武士1「あ…その沈黙は自分で決めると、そういうことですね。うーん…でしたらやはり切腹なんていつでもできますし、ここは一旦切腹はやめて再び殿の元で働かせて頂こうかと。まあこっちの選択の方が、修羅の道ですけどね。でも頑張つてその道を歩みます。はい。ではこれからもよろしく願ひします、殿」

武士1、刀を鞘にしまいそのままはける。厳格な面持ちの殿と武士2、武士3。
暗転。

「素直になれない男女」

舞台には爺さんと婆さん、そしてリポーター。
明転。

リポ「田舎の村を突撃隊！今日は三角村に来ております！この村はどんなところですか？
お爺ちゃん」

爺「とても良い村じゃ」

婆「この人の言うとおりでしゅ」

リポ「なるほど。しかしお二人、先ほどからも見ておりましたがとても仲の良い夫婦ですね」
爺・婆「はあ！？」

リポ「え？」

爺「照れながら」いや夫婦じゃねえしい。そういう勘違いやめてえ」

婆「照れながら」いやホントこの人とはただのおしやななじみだから」

リポ「あ、そうだったんですね。すみません。先ほどから息も合っていましたし、勝手に理想
の老夫婦だなあと思っていましたよ」

爺「いやホントしよういいうのやめて。いや俺は良いんじゃよ？じゃけどこいちゅがしよう
いいうの嫌がると思うからしやあ」

婆「…いや私はじえんじえんあんたとしよういいう風に見られるの…嫌じゃないけど」

爺「トメ…」

婆「サダキチ…」

見つめ合う爺と婆。

爺「…トメ！俺はじゅつとお前のことが好きじゃった！俺の…恋人になってくれん
か！？」

婆「…言うのがおしよいんじゃよ、馬鹿」

抱き合う爺と婆。上手から婆2が出てくる。

婆2「…ふん。この私が黙って身を退いたんじゃからな。絶対しあわしえにおなり」

下手から爺2が出てくる。

爺2「トメはこの御曹司の僕をフツたんじゃ。サダキチ、トメを不幸にしたら、許しやんぞ」

爺「トメ。子供は、野球チームが作れるくらい、欲しいかの」

婆「お馬鹿。まだ結婚もしてないのに、気が早いよ」
爺婆達「はっはっはっはっは」

爺婆達、笑いながらはけていく。
間

リポ「…若返らせてあげてえ」

暗転。

「遅刻」

舞台上手端に人。下手端には友達。
明転。

人「(スマホを見ながら) あいつ遅いな…遅刻か?…お、電話かかってきた」

友達「電話しながら) すまん、寝坊した!」

人「ふざけんなよお前! お前いつも遅刻してんじゃん! たまには時間通りに来いよ!」

友達「ホントすまん! すぐ支度して30分後には着けるようにする!」

人「いやお前ん家からだったら急げば15分で着けるだろ。急げよ」

友達「いやちよつと…スタミナだけ消費させて!」

人「何言ってるんだお前? ソシヤゲの話かおい?」

友達「お前とこれから過ごすであろう5時間分のスタミナは消費させて!」

人「効率的な人か! その効率性をこっちに回せよ! そんなにソシヤゲしたいならこっち

向かいながらすれば良いだろうが!」

友達「歩きスマホは駄目なんだぞ!」

人「急に正論出してくるなよ。確かにそうだけど。だったらそもそも遅刻すんな!」

友達「早くログインボーナスほしいから電話切って良い?」

人「マイペースか!…お前ホントふざけんなよ! いつもいつも遅刻しやがってよ! いつ

も待ちぼうけ食らってる俺の気持ちとか考えたことあんのか!? あと15分で来な

かったら…もうお前とは友達じゃねえ!」

人、電話を切る。友達、はける。

音声『15分後』

人「…まあ…来ないか」

友達、下手から出てくる。

友達「すまん遅れて!」

人「お前…! ソシヤゲ、諦めてくれたのか、」

友達「いや緊急メンテナンスだった」

人「やろうとはしてたんかい!」

暗転。

「追いコン」

舞台には卒業生1と2。
明転。

卒業生1 「おはよう。昨日の追いコン、よかったな」

卒業生2 「そうだな。サークルの後輩達からもらった寄せ書きの色紙、部屋に飾ろうかな」

卒業生1 「その色紙さ、今持ってる？持ってたらちよつと見せてくれない？」

卒業生2 「良いよ。(色紙を取り出し卒業生1に渡す)」

卒業生1 「：あくやっぱりな。幹事やってた武田って後輩いるじゃん？あいつさ、卒業生全

員の色紙に同じメッセージ書いてんのよ」

卒業生2 「そうなんだ」

卒業生1 「数人に見せてもらったけど全員に『あなたと馬鹿できて楽しかったです』って書いてんだよ武田」

卒業生2 「武田幹事のくせに：そういうところ手抜きだな」

卒業生3 が現れる。

卒業生3 「おはよ。何の話してんだよ？」

卒業生1 「おー古澤。あのな、昨日の追いコンで後輩から色紙もらったじゃん？」

卒業生3 「おう」

卒業生1 「武田のやつが、全員に同じメッセージ書いてんだよ」

卒業生3 「え？：俺、武田からメッセージなんてなかったけど…」

卒業生1・2 「え？」

卒業生1〜3 「……」

卒業生4 が現れる。

卒業生4 「よ！何の話してんだよ？」

卒業生1 「お、おー！斉藤！良いところに！いやさ、昨日の追いコンで後輩から色紙もらったじゃん？」

卒業生4 「もらってないけど…」

卒業生1〜4 「……」

卒業生5 が現れる。

卒業生5 「何の話してんだよ？」

卒業生1 「山田！良いところに！昨日さ、追いコンで色紙もらったじゃん？」

卒業生5 「追いコンなんて、あつたんだ…」

卒業生1〜5 「……」

後輩が現れる。

後輩 「あれ？先輩方、何の話をしてるんですか？」

卒業生1〜5 「武田……！！！」

後輩 「僕、武田じゃないです…」

卒業生1〜5・武田 「……」

徐々に暗転していく。

「入り込む役者」

舞台中央に役者1、端に役者2。2人とも椅子に座っている。
明転。

役者2 「山本さん、そろそろ出番ですよね？」

役者1 「話かけないでくれる？私はこれから役に入り込むの。私はもう山本ではない。私はプリンセスサニー。そう私は、プリンセスサニー。入り込むの。私ならやれる。私はやれるわ。私はサニー、私はサニー、私はサニー、私はサニー、私はサニー……そう、私はサニー……そう、サニーよ！私はサニー！サニー！サニー！サニー……入った……私は……サニー……！サニー……！」

役者1、立ち上がる。

声『山本さん』

役者1 「(声のする方に向かって) はい」

役者2 「いや全然入り込んでない！」

暗転。

「秘密」

舞台には組長と舎弟1〜3。

明転。

組長「竜二が闇討ちにあつた…！三角組の奴ら、もう許せねえ…！お前ら…殴り込みじゃ

あ！！」

舎弟1〜3「おおー！！」

舎弟1〜3、荒々しく下手へはけていく。

間

組長、熊のぬいぐるみを取り出す。

組長「ぬいぐるみに）ね〜クマたん。今から殴り込みに行つてきまちゆよ。1人でお

留守番できまちゆか〜？ん〜？何々〜？（ぬいぐるみを耳に当てながら）うん、う

ん…お留守番できる？偉いでちゆね〜！」

舎弟1「忘れもんが…」

舎弟1、下手から戻ってくる。組長、ぬいぐるみに夢中で舎弟1に気付かない。

組長「ぬいぐるみに）やっぱりクマたんは偉いでちゆね〜！帰つて来たらいつぱいよし

よししてあげまちゆからね〜！いやもう今よちよちしちゃう！（ぬいぐるみの頭

をなでながら）クマたんよちよち！クマたんよちよち！クマたんよちよち〜！」

組長、ふと舎弟1に気付き、舎弟1を4度見し、ぬいぐるみを投げ捨てる。

間

舎弟1「組長…」

組長「なんだあ…？」

舎弟1「クマちゃん雑に扱ったら駄目でしょおおー！！」

組長「投げたぬいぐるみに飛びつきながら）ごめんクマたん！！」

舎弟1「でも『たん』付けはヒキました」

組長「ぬいぐるみに）お前は今日からクマ五郎！！」

暗転。

「父親の再婚」

舞台には父と子。
明転。

父「ヒロシ：大事な話がある。父さんな：再婚しようと思ってるんだ」

子「はあ？再婚？今更新しい母親ができるってか？」

父「まあ、ある意味な」

子「ふん。反対だね。今更そんな新しい人認められるか」

父「これはお前のためでもあるんだ」

子「ふざけんな！全部オヤジのためだろ！俺をだしにすんなよ！」

父「…そうだな。もつとお前の気持ちも考えるべきだった。しかしヒロシ、これだけは聞いてくれ。大事なことなんだ」

子「うるせえ。もうこの話は終わりだ」

父「ヒロシ、その再婚相手な：すごいエロイ人なんだ」

子「……ええ？」

父「めっちゃエロイ人なんだ。ホントすごい。歳も20くらい下だしね。お前今17だろ？

どっちかというとお前の方が歳近いよ。それにお前の写真見せたら『すごいこの子可

愛い』って言ってたし。まあ何にせよ、とにかくエロイんだよ」

子「…ええ？ふーん…いやまあ…うん…え？」

父「揺れているな」

子「うるせえな。思春期なめんな」

父「あと、もうこの際カミングアウトしちゃうけど。まあ実はこれが母さんと別れる原因と

なったことなんだけど。父さん実は、ゲイなんだ」

子「その再婚相手大丈夫？」

暗転。

「福引き」

舞台にはおっちゃんとか客。
明転。

客「はい、福引き券」

おっちゃん「はいじゃあ1回ガラガラ回してね」

客、ガラガラを回すマイム。

おっちゃん「お：青玉、2等だ」

客「2等？やった！」

おっちゃん「はいじゃあ2等のポケットティッシュだよ（ティッシュを取り出す）」

客「2等で！？2等でポケットティッシュなの！？」

おっちゃん「この福引き3等までしかないんだよ」

客「あ、そうなんですか：いやでもそれ以下があるの？ポケットティッシュより下があるの？3等の景品って何なんですか？」

おっちゃん「おっちゃんが、中学生の頃書いてた、詩集だよ」

客「いらねえ。確かにそれはいらねえや。じゃあ因みに、1等の景品は？」

おっちゃん「おっちゃんが大学生の頃書いてた、詩集だよ」

客「差が分からん」

暗転。

「分身」

舞台には忍者とその相手。
明転。

相手「次の相手は…忍者か…!」

忍者「先程の戦い…中々だったぞ。そんなお前には、拙者のおつておきの忍術を見せてやる…! (印を結ぶ) 忍法…分身の術!」

相手「分身の術だと!?!」

忍者、反復横跳びを始める。

忍者「(反復横跳びしながら) ふっふっふ…どうだ? 拙者が3人に見えるだろう?」

相手「えー…」

そこに上手から分身1、下手から分身2が現れ、反復横跳びする忍者の後ろに立つ。

相手「…え?…え?…え?…え?」

忍者、反復横跳びをやめる。『はあはあ』とめっちゃ息を切らして疲れている。

間

忍者「(分身1に) いけ!」

分身1、相手に襲いかかる。

相手「誰なんだこいつ!?!」

相手、分身1を殴る。倒れる分身1。

相手「弱いし!」

間

分身2「(忍者に) いけ!」

忍者、相手に襲いかかる。

相手「お前が来るんだ!？」

相手、忍者を殴る。倒れる忍者。

相手「弱いし!」

間

分身2、反復横跳びを始める。

相手「またするんだ!？」

暗転。

「変身」

舞台には怪人。
明転。

怪人「げっへっへ！この町は怪人めっちゃ悪マンのものだ〜！」
ヒーロー2「そこまでだ怪人！」

ヒーロー1とヒーロー2、勢いよく出てくる。

怪人「むむ！お前らは…！」

ヒ1「変身するぞ！」

ヒ2「おう！」

ナレーション『説明しよう！この2人は2人で合わせたポーズをとることで変身できるタ
イプのヒーローなのだ！』

ヒ1・2「へ〜ん〜…しん！」

ヒーロー1と2で組体操のサボテンをしている。

怪人「組体操のサボテンだ！」

間

ヒーロー1と2、一旦はける。

怪人「げっへっへ！この町はめっちゃ悪マンのものだ〜！」

ヒ2「待て！」

ヒーロー1とヒーロー2、勢いよく出てくる。

怪人「お前らは…！」

ヒ1「変身するぞ！」

ナレ『説明しよう！この2人は2人で合わせたポーズをとることで変身できるのだ！』
ヒ1・2「へ〜ん〜…しん！」

ヒーロー1と2、どちらも組体操のサボテンの下の人をしている。

怪人「どっちも下の人だ！」

間

怪人「この町はめっちゃ悪マンのものだく！」

ヒ2「待て！」

ヒ1「変身するぞ！」

ナレ『説明しよう！2人で合わせたポーズをとることで変身できるのだ！』

ヒーロー3、出てくる。

怪人「1人多いよ！」

間

怪人「めっちゃ悪マンだく！」

ヒ1「変身するぞ！」

ナレ『2人で合わせたポーズをとることで変身できるのだ！』

ヒ1・2「へ〜んく〜…」

ヒーロー1と2、変身ポーズをとろうとするが途中で互いにぶつかってしまう。

ヒ1「その動きそうじゃねえだろ？」

ヒ2「はあ？お前に合わせてやってんだろ？」

ヒ1「なんだと？」

ヒ2「なんだよ？」

ヒーロー1と2、互いに殴り合う。心配そうにそれを見ている怪人。

ヒ1・2「…しん！」

怪人「喧嘩も込みの変身ポーズだったの！？」

ナレ『明日も平和を守れ！ヒーロー…ピカピカマン！』

怪人「名前ダサイな！」

ヒ1・2「お前もな！」

暗転。

「募金」

舞台には募金をする人。
明転。
上手から通行人が出てくる。

募金人「募金お願いしまーす」

通行人「募金か……（募金人に）すみません。これ、何の募金？」

募金人「はい。集めたお金で、PS4を買います」

通行人「は？」

募金人「そしてそのPS4を病気で入院している子供、拓郎君にプレゼントしたいと考えています」

通行人「ああ、ああ、はいはい」

募金人「しかし病室ではテレビゲームはできない可能性が高いので、その場合は私がもらいます」

通行人「は？」

募金人「そして毎日PS4のゲームをやります」

通行人「おい」

募金人「そして毎日拓郎君の病室に通ってそのプレイ内容を面白可笑しく話してあげます」

通行人「ああ、ああ、はいはい」

募金人「拓郎君が退院するまでずっと続けます」

通行人「うんうん」

募金人「でも退院したらもう、拓郎君には会いません」

通行人「は？」

募金人「次は私が頑張る番ですから。夢を叶えるために、渡米します」

通行人「え？」

募金人「そして夢が叶った時、拓郎君にもう一度会いに行きます。そして拓郎君と肩を並べて、PS4をやりたいと思います」

通行人「うんうん」

募金人「ですから募金……お願いします」

通行人「ごめん、今財布無い」

募金人「どびょーん！」

暗転。

「魔界ゲーム」

舞台上に勇者と魔王がいる。箱がいくつかある。
明転。

魔王「くっくくく…よくぞたどり着いたな勇者よ」

勇者「姫を返せ魔王！」

魔王「くっくくく…地獄のゲームをして勝ったらよいだろう」

勇者「地獄のゲームだと？」

魔王「ゲームの名は、マハラゲだ」

勇者「マハラゲ？聞いた事がないな」

魔王「魔界に伝わる由緒あるゲームだ。今から説明してやろう」

勇者「聞いてやる」

魔王「まずはジョルントを決定する。今回はあそこにしよう（1つの箱を指す）」

勇者「場所の指定か」

魔王「そして私の合図と共に、悪魔どものうめき声が聞こえ始める」

勇者「なんて不気味なんだ…さしずめ地獄の音楽という訳か」

魔王「うめき声が聞こえる中、我々はジョルントを囲うように動くのだ」

勇者「あの箱を回る、そういうことか」

魔王「悪魔どものうめき声が消えたその瞬間！ジョルントを制した者が…勝者だ！」

勇者「つまり地獄の音楽が終わったらあの箱に座るのか、椅子取りゲームだこれ！」

暗転。

「目利きの仕事」

舞台には目利きとナレーション（音声でも可）。

ナレ「目利きの朝は早い」

明転。

ナレ「目利きは今日、小さなフリーマーケットに来ている。掘り出し物を見つけるためだ」
目利き「（正面に向かって） こういう小さなフリーマーケットにこそ、お宝が眠っているん

です。（辺りを見回しながら） 今日も…発掘、できそうですね」

ナレ「そうやって目利きはおもむろにマーケットを歩き出した」

下手から少年が出てくる。少年、物売るマイム。

目利き「む…あの少年の売り物…!」

ナレ「少年の売り出している物は人形やカード、ゲーム等のおもちゃばかりだ。目利きは
何に目を付けたのか」

目利き「手前にあるゲームソフト、『トカゲクエスト2』です。あまりのクソゲーですぐに
生産中止となりましたが、それ故一部のクソゲーマニアの間で高額でやり取りさ
れているソフトです。よくあることなんです。ああいった物の価値がまだ分からな
い少年が、お宝をフリーマーケットで売る。しかし我々にとってここは、戦場です」

ナレ「目利きの目が鋭くなった」

目利き「少年と言えど、甘えは許されません。私は、その価値を教えず、あの少年からソフ
トを買いますよ。これが、プロなんです」

ナレ「しかしそのように話す目利きの目は、少し辛そうだった」

目利き、少年に近づく。

目利き「少年、このトカゲクエスト2をもらおうか」

少年「ありがとうおじさん! 39800円だよ!」

目利き「…適正価格!」

暗転。

「野菜達」

舞台には野菜1〜3。地べたに座っている。
明転。

野菜3 「もうすぐ人間に収穫されるのか」

野菜2 「そうですね。楽しみです」

野菜1 「ま、この中ではこの俺が一番旨い野菜だけだな。見よ！この旨そうな体付きを！」

野菜2 「いや私が一番美味しい野菜ですね。私が一番効率的に光合成を行ってきましたから」

人間1、下手からやってくる。

野菜3 「来た来た！人間だ！」

人間1、野菜1の後ろに立つ。

野菜1 「まずは俺から収穫されるみたいだな」

人間1、両手で野菜1の脇の下を持つ。そして引っこ抜き始める。

野菜1 「引っこ抜かれるタイミングに合わせて）ぎゃああああ……うわあああ……！！
いやああああ……！！」

人間1、野菜1を最後まで引っこ抜く。野菜1、無の表情になる。

野菜3 「何今の！？」

野菜2 「めちゃくちゃ叫んでましたね……！そんなに……？そんなにキツイんですか……？」

野菜3 「恐い……！恐いよ……！」

人間2、下手からやってくる。

人間2 「おめえそんな抜き方したら駄目だあ」

野菜2・3 「え？」

人間2 「この野菜は最初に根っこば刈って（野菜2の下を刈るマイム）……持つところもここだあ（野菜2の脇腹を持つ）」

野菜3 「なんだ…引き抜き方を間違えていたの、」

人間2、野菜2を引っこ抜き始める。

野菜2 「ぎえええええええ！！！！！」

野菜3 「結局叫ぶんかい！」

暗転。

「領地」

舞台には子供が3人。
明転。

子供1 「(舞台中央に線を引くマイム) はい線引いたー!これでこっちから先(上手側)は俺の領地だからー!俺の国だかんねー!」

子供2 「じゃあこっちは(下手側)は俺の陣地ー!俺の国ー!」

子供1 「お前(子供3)はどうすんだよー?」

子供3 「僕は…この線の真ん中に、舞台を開くよ。そして、2人の国の橋渡しをするんじえけん。隣の国同士ということ、時には敵国同士になることもあるよ。そんな時でも国の境界線、ワシの屋台でラーメンを食べる時だけは、敵味方関係のない、肩を並べる同志になる。ワシはそんな場所を提供できる存在に…なってやるんじえあ」

子供1・2 「……」

子供2 「…素敵やん」

子供1 「え?」

暗転。

「魔女①」

舞台には魔女と相手1、相手2、相手3。
明転。

相手1「お前は誰だ!？」

魔女「私はこの森に住む魔女だ…!神聖な森を侵す侵入者どもめ…これでも食らえ!(手を相手1にかざす)」

相手1「ぐわああ!…!…!なんとも、無い…?」

魔女「ふっふっふ…今の魔法は、食らった者ではなく、食らった者にとって大切な誰かが傷つく魔法だ…!」

相手2「ぐわああ!…!…! (倒れる)」

相手1「ルーイ!」

魔女「ふっふっふ…まだまだいくぞ!(手を相手1にかざす)」

相手1「ぐう…!」

相手3「ぐわあ!(ダメージを受けるが倒れはしない)…!また、大切な者が傷つく魔法か?」

魔女「違う。今の魔法は、食らった者にとって微妙な距離感だと思ってる者が傷つく魔法だ…!」

…!」

相手3「え?」

魔女「食らった者にとって、皆でいると一緒にあって馬鹿話できるけど2人きりになってしまうと『あちゃー』と思いつながらなんか当たり障りのない真面目な話しかできなくなるくらいの距離感だと思ってる者が傷つく魔法だ…!」

相手3「(相手1)どゆこと?」

相手1「すまん…」

暗転。

「魔女②」

舞台には戦士。
明転。

戦士「くっ…魔女の森に来たは良いが…！魔物との戦いで傷だらけだ…！腹も減っているし…限界だ…！このまま…倒れるのか…！」

魔女「いーひっひっひっひー！」

下手から魔女が大きな鍋を棒でかき混ぜながら出てくる。

魔女「そこのお方、傷に良く利く薬は如何かなあ？」

戦士「薬だと…？魔女の薬か…！怪しさしかないが…このまま倒れるよりはマシか…！良いだらう…頂こうか…！」

魔女「(ポケットから小さい容器を取り出し) はい、オロナイン」

戦士「現代的！じゃあその鍋は何なんだ！」

魔女「豚汁」

戦士「一杯頂けます？」

暗転。

「力①」

舞台には勇者と仲間、魔王。
明転。

魔王「その程度か勇者よ」

勇者「くっ…！やはり魔王の名は伊達じゃない…！」

魔王「お前も父親と同じ末路を辿るのだ」

勇者「父さんの仇は…絶対に討つ！しかし、このままでは…！」

仲間「勇者様！だったらオイラ達の力を使ってください！」

勇者「ジョン！？」

仲間「（勇者に手をかざしながら）勇者様が両手を挙げ念じれば、世界中の皆から力を集めることができるはずです！」

勇者「分かった！やってみる！（両手を挙げる）皆！僕に力を分けてくれ！」

上手から戦士が出てくる。

戦士「ふっ…俺の力だったらいくらでも分けてやるぜ！（勇者に手をかざす）」

勇者「キミは確か…！」

仲間「豪傑の戦士！クリストファー！」

戦士、はける。入れ替わりに盗賊が出てくる。

盗賊「坊やが負けたらまた悪人に戻っちゃうわよ。だから必ず、勝って（勇者に手をかざす）」

勇者「あの人は…！」

仲間「さすらいの女盗賊！ジェニファー！」

盗賊、はける。入れ替わりに主人が出てくる。

主人「坊主…また元気な姿で泊まりに来てくれよ！（勇者に手をかざす）」

勇者「あの人は…！」

仲間「最初の町でお世話になった、宿屋のオヤジ！」

勇者「そんな人まで出てくるんだ…！」

主人、はける。入れ替わりに父親が出てくる。

父親「立派になったな…フミヤよ（勇者に手をかざす）」

勇者「えっと…誰だっけ…？」

仲間「死んだと聞かされていたが実は奇跡的に助かって今は魔界の小さな村で暮らしている、勇者様の父親！」

勇者「生きてたんだ父さん！というかこのタイミングで出てくるの？」

父親、はける。

勇者「でも皆のおかげで力は漲ってきた…！魔王！最大魔法を…食らえー！」

勇者、魔王に手をかざす。『ドカーン！』という爆発音。しかし仁王立ちしている魔王。

魔王「ふん…その程度か、」

仲間「（魔王を殴る）おらああああ…！！！」

魔王「ぐわああああ…！！」（倒れる）

勇者「ジョンつよー！」

暗転。

「力②」

舞台には戦士と深くフードを被った敵。戦士は倒れ、敵は仁王立ちしている。
明転。

戦士「くそ…！こいつ…強い…！兄さんの仇を討てない…！」

『力が欲しいか…？』

戦士「な、なんだこの声は…！？」

『力が欲しいか…？』

戦士「誰なんだお前は！？」

『何者にも負けない…力が欲しいか？』

戦士「お前が誰かは知らないが…俺は復讐者だ！良いだろう！もらえらというのなら…！」

『力が欲しいか？そこで仁王立ちしている者よ』

戦士「そっち！？そっちに言ったの！？普通こういうのって負けてる側にくるんじゃないの…！」

『私の力で、倒れてるやつの特典を確実に刺したいか？』

戦士「なんだその誘い文句！」

敵、フードを取り、更にイヤホンを取る。

敵「え？」

戦士「こっちは聞こえてないのかよ！」

暗転。

「北風と太陽①」

舞台中央後ろには北風と太陽、そして上手前には厚着をした旅人。

旅人「ショートショート！北風と太陽！」

明転。

北風「びゅーるるる！太陽よ」

太陽「皆さんさん！なんだ北風よ？」

北風「あそこに旅人がいるだろう？」

太陽「いるな、厚着をした旅人が」

北風「今からあの旅人の服をどちらが先に脱がせられるか勝負しないか？」

太陽「良いだろう、受けてたとう」

北風「ではまず俺からだ！」

北風、下手前に出てきて、旅人の方へ手をかざす。

北風「びゅーるるる！！」

下手から黒子が2人出てきて、旅人の服を吹き飛ばそう（剥ぎ取ろう）とする。北風、一生懸命に何回も旅人へ手をかざす。それに合わせて黒子2人も旅人の服を吹き飛ばそう（剥ぎ取ろう）とする。

北風「中々しぶといな…ならば最大出力だ！はああああ…はあ！！」

北風、全力で旅人に手をかざす。黒子2人が吹き飛ばす。

北風「お前達が吹き飛ばんかい！」

暗転。

「北風と太陽②」

舞台中央後ろには北風と太陽、そして上手前には厚着をした旅人。

旅人「ショートショート！北風と太陽パート2！」

明転。

北風「びゅーるるる！太陽よ」

太陽「さんさんさん！なんだ北風よ？」

北風「あそこに旅人がいるだろう？」

太陽「いるな、厚着をした旅人が」

北風「今からあの旅人の服をどちらが先に脱がせられるか勝負しないか？」

太陽「良いだろう、受けてたとう。ではまずは私からだ」

太陽、下手前へ出てきて、ポーズをとる。

太陽「さんさんさん！めらめらめら！どうだ？段々この場が熱くなってきただろう？」

旅人、熱がるリアクション。

太陽「さあこの場の気温はもっと上がるぞ！さんさんさん！めらめらめら！最大出力だ！

燃え上がれえ！！（ポーズをとる）」

北風「あつっ…（上着を脱ぐ）」

太陽「お前が脱ぐんかい！」

暗転。

「ケーキじゃなくてシュークリーム買って来ちゃった人」

舞台には人1と人2がいる。

人1「ショートショート！ケーキじゃなくてシュークリーム買って来ちゃった人！」

明転。

人2「やべーケーキ買うの忘れてたわ」

人1「マジかよー。クリスマスなのにケーキないのは流石に嫌だよ」

人2「すまん、じゃあすぐコンビニ行って買ってくるわ。どんなケーキが良い？」

人1「いやまあ別に…種類は何でも良いよ」

人2「分かった。何でも良いんだな？」

人1「いやうんケーキならね。ケーキだったら何でも良いよ」

人2「分かった。何でも良いんだな？行ってくる」

人1「いやケーキならね。ケーキだったら、何でも良いよ」

人2「分かった。何でも良いんだな？行ってくる」

人1「いやあのケーキだったら行ってちゃんと行って。何でも良いんだなの前にケーキだったら行ってちゃんと行って」

人2「分かった。行ってくる」

人1「いやだから1回で良いからケーキだったら行ってちゃんと行って。言って行って」

人2「行ってくる」

人1「いやだから行って行って。ちゃんと行って行って」

人2、はけていく。

人1「ねえ、言って行って！言って行ってよ！ねえ！」

間

人2、ビニール袋を持って戻ってくる。

人2「はい、買ってきたよ（ビニール袋を人1に渡す）」

人1「(中身を確認して)シュークリームじゃーん!!」

暗転。

「嘘をつくという概念が無い世界」

舞台には探偵と人1、人2、犯人。

探偵「ショートショート！嘘をつくという概念が無い世界！」

明転。

探偵「皆さん。この中に…今回の事件の犯人がいます！」

他3人「なんだって!？」

犯人心の声『くつくつく…!馬鹿め…!バレる訳がねえ。俺のトリックは完璧だ。なんせ俺のIQは200。対してあの探偵のIQは150程度。確かに普通の人間と比べたら頭がキレるかもしれないねえが俺には遠く及ばねえ。おそらく俺の仕掛けた罠に嵌り違う奴を犯人だと思っっているんだろうよ。くつくつく…!』

探偵「(人1に近づき) あなたが犯人ですか？」

人1「違います」

探偵「(人2に近づき) あなたが犯人ですか？」

人2「違います」

探偵「(犯人に近づき) あなたが犯人ですか？」

犯人「そうです」

暗転。

「我慢という概念が無い世界」

舞台には上司と部下。

部下「ショートショート！我慢という概念が無い世界！」

明転。

部下「なんですか部長？」

上司「キミに任せた仕事だがね、ミスがあったんだよ（資料を見せる）。どうしてくれるんだ？」

部下「え？ちよつと待ってください。これは部長の指示で、」

上司「言い訳なんて聞きたくないんだよ！このミスはキミのものだ！どう責任をとるつもりなんだ！？うん！？」

部下「…！」

上司「そもそもキミは前々から態度がよくないんだよ！仕事も遅いし！ゆとりってやつか！？もうちよつとマシな人間になりなさいよ！」

部下「…なにに…？…このクソや、」

部下心の声『はっ！このまま勢いに任せて言葉を発してしまつたらこのクズと同じになつてしまう…！こんな人と同類にはなりたくない…。ここはじつと耐えよう…』

『ばあー！』という音と共に神様が出てくる。上司は止まっている。

部下「…え？何！？あんた誰!？」

神様「あなたは今…我慢を、しましたね？」

部下「え？何？我慢って何？」

神様「ここは我慢という概念が無い世界。あなたのように我慢ができる人はこの世界に必要なありません」

部下「え？は？」

神様「こことは違う、ケーキと明太子が美味しい桜が綺麗な世界へお行きなさい」

神様、部下に手をかざす。

部下「何その良さそうな世界ー！！」

部下、飛ばされるようにはける。上司、動き出す。

上司 「あれ？あいつはどこ行った？」
神様 「…我慢のできない人は、この地獄のような世界で」

暗転。

「実は拳銃に弾入れるの忘れてる人」

舞台には殺し屋と悪人。

殺し屋「ショートショート！実は拳銃に弾入れるの忘れてる人！」

明転。

殺し屋「(拳銃を向けながら) 追い詰めたぞ…ミスターウナギ」

悪人「く、くそ！な、なんで伝説の殺し屋エックスが…！」

殺し屋「俺に狙われた以上…お前の生存率は、0%だ」

悪人「畜生…！」

殺し屋「お前がやってきた悪事に後悔しながら死んでゆけ。ゴ…トウ…ヘル…！」

殺し屋、引き金を押すが不発。何回か押すが不発。チラチラと拳銃を確認しようとする。

間

悪人、素早く懐から拳銃を取り出し、殺し屋に撃とうとするが不発。

悪人「(グダグダしながら) あ、俺も弾入れるの忘れてた！」

殺し屋「(グダグダしながら) お、お前もか…！」

暗転。

「人を殴ると10秒前にタイムスリップする人」

舞台には不良1と不良2

不良1「ショートショート！人を殴ると10秒前にタイムスリップする人！」

明転。にらみ合う不良1と不良2。

不良2「やんのかてめえ…！？おらあ！」

不良2、不良1を2発殴る。不良1、反撃するがそれを避ける不良2。更に不良1を3発殴る不良2。不良1、何とかパンチを不良2に当てられる。

間

時間が巻き戻り、2人とも逆の動きで10秒前に戻る。

間

不良2「おらあ！」

不良2、不良1を2発殴る。

不良1「ここから！？」

不良1、反撃するがそれを避ける不良2。更に不良1を3発殴る不良2。不良1、何とかパンチを不良2に当てられる。

間

時間が巻き戻り、2人とも逆の動きで10秒前に戻る。

間

不良2「おらあ！」

不良2、不良1を2発殴る。不良1、反撃するがそれを避ける不良2。しかし頑張って反撃を続け、とうとう不良2にパンチを当てられる不良1。

間

時間が巻き戻り、2人とも逆の動きで10秒前に戻る（冒頭）。

間

不良2 「やんのかてめえ…!!?」
不良1 「おらあ!」

不良1、不良2に不意打ちのパンチを当てる。
間

時間が巻き戻り、不良1は後ろ歩きで下手端へ、不良2は後ろ歩きで上手端へ移動する。

間
不良1と不良2、互いにゆっくりと中央まで歩いていき、寸前のところで止まる。
間

不良2 「やんのかてめえ…!!?」
不良1 「おらあ!」

不良1、不良2に不意打ちのパンチを当てる。
間

時間が巻き戻り、不良1は後ろ歩きで下手端へ、不良2は後ろ歩きで上手端へ移動する。

間
不良1、猛ダッシュで不良2のところまで近づきパンチを当てる。
間

時間が巻き戻り、不良1は後ろダッシュで下手へはけ、不良2は後ろ歩きで上手へはける。

間
上手から不良2がゆっくり歩き、そのまま下手へとはけていく。
間
下手から不良1が出てくる。

不良1 「行ったか…」

不良1、上手へ向かって歩いて行くが、はける寸前で不良3が出てきてぶつか

不良3 「ああん!? やんのかてめえ!?!」
不良1 「この町不良多くない?」

暗転。

「服に染みを付けると爆発してしまう人」

舞台には人1、人2、店員、黒服1、黒服2。

黒服1「ショートショート！すごい超能力を使えるがその代償として服に染みを付けると爆発してしまう人を捕らえるために張り込みをしている黒服達！」

明転。

店員「(人1と人2に)ただいま当店ではキャンペーンで、カレーうどんを、なんと10円で販売しております。如何なさいますか？」

人1「やったラッキー！じゃあカレーうどんで」

人2「俺は：そんな好きじゃないから：カレーうどんはいらなかなあ…」

黒服1「確保ー！！！」

黒服1と黒服2、人2を拘束する。店員、はける。

人2「え！？何！？何々！？」

そのまま黒服達、人2を拘束したままはける。

人1「……能力者たるもの、カレーうどんくらいは食べるようになってないといかんなあ……若造よ」

店員、器を持って入ってくる。

店員「カレーうどんお待たせしましたー、あ！（転んで器を人1にぶちまける）」
人1「あ」

暗転。

『ボカーン！』という爆発音。